



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

母子の愛着システム不全評価尺度の作成（1）：2歳児における質的データの分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 廣子, 大河原, 美以, 殿川, 佳子, 藤岡, 育恵, 響, 江吏子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/108094

母子の愛着システム不全評価尺度の作成 (1)

—— 2 歳児における質的データの分析 ——

鈴木 廣子*・大河原 美以**・殿川 佳子***・藤岡 育恵***・響 江吏子**

教育心理学

(2010年9月27日受理)

1. 本論の目的

子どもたちが成長の途上で抱える心理的問題は、ますます深刻さを増している。大河原¹⁹⁾は、これまでの臨床経験を通して、きれる子どもやおちつきのない子どもの増加、いじめをする子どもの問題、一部の不登校や心身症や学級崩壊などの問題の根底には、感情制御の発達不全の問題があることを指摘し、感情制御の発達不全の症状形成の仮説モデルを提示してきた¹⁹⁾。感情制御の発達不全の症状形成においては、乳幼児期の愛着システム不全による感情制御の脳機能の発達の問題が重要な役割を果たしている。そこで大河原²⁰⁾は、脳科学研究との協働を可能にするコンテキストにおいて愛着システム不全の仮説モデルを提示した(本論集;別稿)。

臨床経験の中から得られた仮説の妥当性を示すためには、実証的なエビデンスを示す必要がある。本研究は、大河原²⁰⁾に示した愛着システム不全の仮説モデルの妥当性を検証するための予備研究にあたる。仮説を心理学的に実証するためには、問題意識に基づいた現代の母子の関係性の実態を反映した愛着システム不全評価尺度が必要である。そこで筆者らは、愛着システム不全評価尺度を作成するための予備調査を行った。

本論の目的は、尺度作成のための予備調査を質的に分析し、尺度項目を選定することである。はじめに、これまでの愛着概念に関する先行研究をレビューし、本研究における愛着システム不全の仮説モデルの位置

づけを示す。次に、予備調査で収集した質的データの分析結果を記述し、考察を加えたうえで、尺度項目を選定する。

2. 愛着概念をめぐるこれまでの心理学研究の概観

2. 1 ストレンジシチュエーション (SSP) 法による母子の関係性に関する研究

Bowlby, J^{4) 5) 6)}によって提唱された愛着理論に関する研究は、Ainsworth, M. S.ら¹⁾による乳幼児の愛着パターンの研究を起点とする。彼らは、乳幼児と養育者との分離再会場面を観察し、愛着のタイプを分類するストレンジシチュエーション法(新奇場面法)を開発した。そこでは、親との愛着関係が安定している安定型、不安定である回避・両価型の3つのタイプがあることを明らかにした。

その後、Main, M. & Morgan, H.¹⁶⁾は、Ainsworth, M. S.ら¹⁾のストレンジシチュエーション法における愛着の古典的3分類にあてはまらない非統合型・失見当型愛着行動(D型愛着行動)を報告した。非統合型とは、矛盾した動作パターンを示す反応であり、失見当型とは、ぼんやりとした表情をして身動きせず、親がいる前でも行動の方向性がみられない状態を示す反応である。Main, M. & Morgan, H.¹⁶⁾は、このタイプの子どもの状態が解離状態に類似していることを指摘し、このタイプの行動を示す子どもの親には、親側のおびえた行動と子どもを脅かす行動がみられたと報告している。

* すずきひろこ心理療法研究室

** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

*** 東京学芸大学大学院教育学研究科

2. 2 内的作業モデルに関する研究

1980年代に入ると、内的作業モデルが着目された。遠藤⁸⁾によると、Bowlby, J.^{4) 5) 6)}は「子どもが愛着対象との具体的な経験を通して、愛着対象への近接可能性、愛着対象の情緒的応答性等に関する表象モデル、すなわち内的作業モデルを有するに至ると考えた」と述べている。遠藤⁸⁾は、内的作業モデルとは、愛着に関連する多様な情報の統合、あるいは、注意、記憶、感情、行動等の体制化を進行させるための個人特有の心的枠組みとして、意識外において重要な機能を果たすものであることを述べている。

このような内的作業モデルを前提とすると、愛着は生涯にわたり一貫性、連続性をもつものとして、対人関係において重要な役割を担うと考えられてきた。そこで、成人期において個人に内在化された心的表象としての内的作業モデルを評価する研究が多く行なわれてきた。

発達心理学の領域では、Main, M.ら¹⁷⁾によって、アダルトアタッチメントインタビュー法（以下AAI）という成人期の愛着に関する測定法が開発され、愛着表象の分類法が確立すると同時に、愛着の世代間伝達に関する研究がさかんに行われた。数井ら¹²⁾は、愛着の世代間伝達を日本人母子において検討した。母親に対してAAIを実施し、子どもに対して愛着Qセット法により愛着行動を測定した結果、安定型の母親の子どもの方がそれ以外の不安定型の母親の子どもよりも愛着安定性が高かっただけでなく、相互作用や情動制御においてもポジティブな傾向が高いことが明らかとなった。しかしながら、愛着表象の世代間伝達のメカニズムについては、はっきりと解明されていない。田辺・米澤²⁶⁾では、親子を取り巻く環境や、母親自身の気持ちの有り様で世代間の連鎖を断ち切ることも可能であることが示されており、母親は自分の被養育経験をどう受け止め、それを自分の中でどう内在化していくかが重要であると述べられている。

また、Hazan, C. & Shaver, P. R.¹¹⁾は、上述したAinsworth, M. S.ら¹⁾の乳児における3つの愛着タイプが、成人期の親密な対人関係のスタイルにも当てはまることを示した。それをうけて、社会心理学の領域では、成人の愛着スタイルが対人関係・恋愛関係に影響を及ぼすという観点からの研究が盛んになった。金政¹³⁾によると、社会心理学的立場からのアプローチは、この“成人の愛着スタイル”を仮定することによってなされており、成人の愛着スタイルとは、「乳幼児期の母子関係によって基礎が形成され、内定作業モデルの作用によって、初期モデルに沿った形で発達

していくような個人の認知による自己や他者への信念や期待と捉えている」と述べている。

遠藤¹⁰⁾によると、社会心理学研究においては、その測定方法は自己報告型の質問紙法が主であり、個人の無意識的過程に焦点を当てているAAIとは異なり、個人が意識的に想起し得る関係性の側面を把握しようとしているところに特徴があると述べている。発達心理学における成人期の愛着研究と、社会心理学における成人期の研究は、異なる2つの流れと考えることができるだろう。

しかしながら、安藤²⁾は、そもそも青年期と乳幼児期の愛着をどこまで同列にまた同様の理論枠で論じることができるのか、また成人の愛着に関する2つの研究の流れはどこで重なり合い、どこで食い違うのかなどが今後の課題であることに言及しており、内的作業モデルのメカニズムについてさらなる理論的な精緻化にむけての研究が行われていると言える。

2. 3 情動制御システムとしての愛着研究

遠藤⁹⁾は、Bowlby, J.⁴⁾が最初に示した定義は「危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて、特別の対象との近接を求め、またこれを維持しようとする個体（人間やその他の動物）の傾性である」とし、Bowlby, J.⁴⁾は「この近接関係の確立・維持を通して、自らが“安全であるという感覚（felt security）”を確保しようとするところに多くの生物個体の本性があるのだと考えていた」と述べている。青木³⁾は、精神分析的発達理論の立場から「内的作業モデルは、認知的な制御システムのみならず、安全感が脅かされるような感覚からそれを低減するのに適切な一連の行動を指令する情緒制御モデルとして再概念化された」と記述しており、「内的作業モデルは、乳幼児の愛着対象との相互関係の現実的な積み重ねから表象された、他者との関係に対する見通しであり、間主観的なものでもある。」と述べている。乳幼児と母との間の情動調律²⁵⁾による最初の愛着関係の構築に立ち返ると、愛着の情動制御機能にこそ注目する必要がある。

Sroufe, L. A.²⁴⁾では、愛着機能を乳児の情動調節の観点からとらえ、生後2年目までの養育者とのやり取りが子どもの情動調節に重要な役割を果たしていることを示唆している。安定した愛着関係にある子どもは、激しい情動が喚起されたときに、自己制御が可能であり、もし自分の力で制御することができなかったとしても、他人を頼ることを学習していると述べている。Cassidy, J.⁷⁾も同様に、感情調節と愛着の質に密接な関係があるとし、ネガティブな情動を高めるまたは制

限することによって特徴づけられた子どもは、愛着関係も不安定である可能性が高いということを述べている。坂上ら²³⁾も愛着と情動制御に関する研究を行っており、坂上²²⁾は、このような愛着と情動制御機能に着目する視点は、愛着の時間の安定性や変容可能性、世代間伝達のメカニズムを明らかにする上で、今後より重要になってくるだろうと述べている。

3. 本研究における愛着システム不全の仮説モデル(図1)

大河原²⁰⁾は、情動制御の脳機能の発達の視点から、愛着システムを「負情動制御システム」ととらえ、愛着システム不全の仮説モデルを提示した(図1)。(詳細は本論集別稿;大河原²⁰⁾を参照のこと)

生体防御反応としての負情動が喚起されると、子は情動性発声(Vocalization)によって自己のSOSを母に求めることになる。健康な愛着関係においては、子の泣き声やぐずりを母は自身の内臓感覚レベルで共鳴し(情動調律²⁵⁾)、子が求める安心を与えることができる。ところが愛着システム不全が起こるときには、子から発せられる生体防御反応としての負情動によって、母の内臓感覚に不快が生じ、負情動が喚起される。そのため、子のSOSの訴えに対して適切な情動調律が行なわれず、母は自身の辺縁系を支配している負情動を制御するために必要な行動(①子にいらだち叱責②子におびえひれふす)をとることになる。それが愛着システム不全を引き起こす不適切な関わりを生むというのが、大河原の仮説モデルである²⁰⁾。そのような不適切な関わりは、子の過覚醒反応をエスカレートさせ、解

離反応に転ずることでの適応を促すため、負情動は自己に統合されず、感情制御の発達不全状態を示すことになるのではないかと考えられる¹⁹⁾。

前述してきたように、これまでの愛着研究の多くが子どもの側に起こっていることを対象としてきたものだったのに対して、大河原²⁰⁾の仮説では愛着システムとしての母子相互作用に着目し、母の側に生じる負情動に注目している点に特徴がある。

4. 調査方法

4. 1 調査協力者

2-3歳子どもをもつ母 201名。調査は、東京都内の子ども家庭支援センターと岩手県内の保育園と小児科医院の協力を得て実施した。うちわけは、東京都内の母72名(回収率72%)、岩手県内の母129名(回収率86%)である。

4. 2 調査内容

「授乳、卒乳・断乳、離乳食、睡眠、排泄、遊び、その他の場面」において、「困ったこと、困った場面、お子さんの困った行動」について、「できるだけ具体的なエピソードと母自身の気持ち」を自由に記述することを求めた。記述に際しては、そのことが生じた月齢・年齢を記載する欄も設けた。

4. 3 調査時期

平成21年12月～平成22年2月

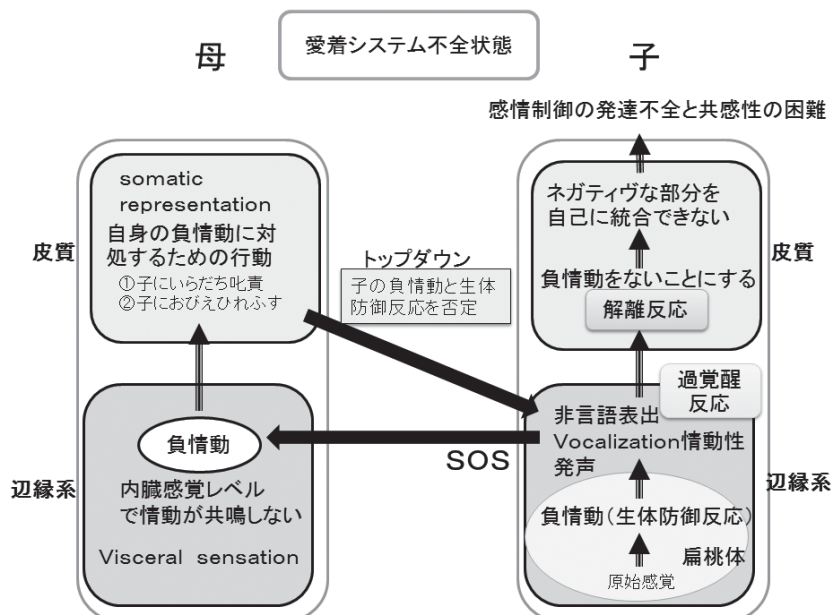


図1 愛着システム不全の仮説モデル (大河原²⁰⁾)

5. 質的分析

5. 1 質的分析方法（愛着システム不全を示す親子関係の分類）

母による子どもの「困ったこと」についての自由な「書きぶり」には、子どもの困った行動を母がどのようにとらえているかという思いが反映されていた。そこで、母が子どもの困った行動について記述するその記述のニュアンス（＝コンテクスト）から読み取ることができる親子の関係性を、分類の対象とした。

分類の枠組みとしては、大河原²⁰⁾の愛着システム不全の仮説モデル（図1）に基づいて、子どもが泣いたりぐずったりして不快感情を表出する場面での母の感情を基準にした。自由記述を概観すると、子どもの泣きに対して、母が「いらだつ」傾向と逆に「おびえる」傾向にあることが読み取ることができ¹⁸⁾、想定していた愛着システム不全の仮説モデル（図1）と一致していた。そこで「いらだちタイプ」と「おびえタイプ」を想定し、いずれにもあてはまらないものを「中立タイプ」として分類を試みた。

まず、全回答数201名のうち、記述の量の少なさや情報不足により「書きぶり」からの判断が困難と思われた89名分を除外し、112名分のデータを質的分析の対象とした。

分類の内容妥当性を確認するために、経験の異なる3者による分類の一致率を参考にした。50代で臨床経験が豊富であり子育て経験のある鈴木（児童精神科医）と大河原（臨床心理士）に加えて、20代で子育て経験のない殿川・藤岡・響（3人で協議して検討）の3者がそれぞれ独自に、質的データを「いらだちタイプ」「おびえタイプ」「中立タイプ」に分類した。判断が分かれた項目は、2者が一致した項目に分類した。いらだちタイプは54名、おびえタイプは49名、中立タイプは21名であった。一致率は、いらだちタイプ87.0%、おびえタイプ89.8%、中立タイプ100%であり、「書きぶり」のニュアンスの受け取り方により、「いらだち」か「おびえ」かの判断が分かれる項目がわずかにあったが、概ね弁別は良好であり、内容妥当性は確認できたものとみなした。各タイプの典型例を表1に示した。

以下に、それぞれのタイプの典型例を解説し、「授乳、卒乳・断乳、離乳食、睡眠、排泄、遊び、その他」のタイプ別場面ごとの特徴をまとめた。

5. 2 いらだちタイプの特徴

①典型例（表1）

Aさんの場合：授乳に関して、「子どもが3ヶ月頃には、自分のおっぱいトラブルが頻繁で、子がそれでぐずぐずするのでつらかった。7ヶ月では外出先で子がおっぱいを欲しがるので困り、外出が億劫になった。1歳では、6ヶ月頃から夜間は2時間おきの授乳で、一度、子どもが乳首をくわえると30分ははなしてくれずイライラして泣きたくなった」と長期間にわたり授乳に困難さを感じていた。この授乳に対する困難さは、子の睡眠に大きな影響を与えた。「（誕生してから）夜間、3～4時間毎の授乳が、6ヶ月頃から2時間おきになり、断乳するまでつらかった」と記載していた。1歳5ヶ月で断乳したが「（子が）乳首をさわりながら寝るようになって、不快感で苦しかった」、さらに断乳後の睡眠でも「夜中に2～3回は泣いてママを探し、朝も隣にママがいないと号泣。隣にママが行くとそのまま寝て、なかなか起きない」と記載していた。断乳に時間がかかると、当然、離乳食は進まず「（8か月で）あまり食べてくれず、おっぱいだけで不安。（1歳2ヶ月で）やわらかいものしか食べない、（1歳5ヶ月で）断乳して食べる量は増えたが、限られた食材しか食べず、外食が難しかった」となっていた。遊びに関しては、「（8ヶ月で）ママべったりで家でも外でも大好きな車でしか遊ばなかった、（1歳6ヶ月で）団地で遊ぶ子どもたちには近づかず、滑り台、ブランコも怖がって、どう時間を過ごしてよいかわからなく、車のおもちゃばかり与えていた」とあった。排泄に関しては、「（2歳10ヶ月で）トイレへの興味がなくなって行きたがらず困る。義父母から“そろそろオムツは卒業だ”と言われ焦り、プレッシャーで子どもに当たってしまった、（3歳2ヶ月で）ウンチをおまるトイレでしたがらず、尿意もわかっている様子なのに、オムツにすることにイライラした」と記載していた。Aさんの場合、特に授乳と排泄に関して、「つらかった、億劫になった、イライラした、プレッシャーで子どもに当たってしまった」などの感情表現が多い特徴があった。

Bさんの場合：Aさんに比べて記載量は少ないが、授乳に関しては、「（1歳で）人前でおっぱいをほしがって胸を触ってきたこと」を挙げた。明確に授乳での困難さは表現されていないが、人前で子がおっぱいを欲しがる、それで母の乳房を触るという自然な反応に対して不快感を表現していることに注目する必要がある。授乳そのものがBさんには不快なものとなっていて、母子間の悪循環が、睡眠、卒乳・断乳、離乳食、排泄に大きな影響を及ぼしていることが推測される。卒乳・断乳に関しては「（2歳1ヶ月で）今現在飲ん

表1 自由記述調査にみられたタイプ別典型例

	いらだちタイプ：Aさん	いらだちタイプ：Bさん	おびえタイプ：Cさん	おびえタイプ：Dさん	中立タイプ：Eさん
①授乳に関して	ママのおっぱいトラブルが頻繁にあり、そうすると息子もぐずぐずしてつらかったです（3ヶ月）外出先や友人宅など人がいる場になると、ぐずぐずしておっぱいをほしがってばかりで困りました。外出するのがおっくうになりました（7ヶ月）6ヶ月ごろから夜間は2時間おきの授乳で一度くわえると30分は乳首をはなしてくれなくてイライラして泣きなくなりました（1歳）。	人前でもおっぱいをほしがってすぐ胸をさわってきたこと（1歳）。	今も授乳しています、本人まかせにしてはいるのですが、親としてまーいいかといった感じでいるのですが。母乳100パーセントで育ちました（2歳2ヶ月）。	おっぱいばかりで離れられなかった（8ヶ月ころ）。	ひとり目の子育てのとき、何もかも始めてで、何をやっても泣き止まず、お恥ずかしながら子どもと一緒に泣いてしまっていました……。ミルク（哺乳びん）を嫌い全く飲んでくれず、卒乳まで通して母乳で育てました。生後1～2ヶ月は睡眠リズムも整わず、授乳→ようやく寝る→排泄ですぐ目覚める→おなかがすいたと泣く。しかしまだ母乳がたまっていなくて出ない……。夜中も大福やおにぎりを頑張って食べ、睡眠不足、疲労……。で困りました。その後時期がくと睡眠リズムも一定し、母乳もまとめ飲みをしてくれるようになり、解決していきました（1-2か月ころ）。
②卒乳、断乳に関して	夜間2時間置ききの授乳に疲れて断乳した。2週間前から言い聞かせての効果であまり泣きさわがなかった。断乳後、乳首をさわりながら寝るようになって、不快感で苦しかったです（1歳5ヶ月）。	今現在でも飲んでいること（2歳1ヶ月）。	本人まかせで、いいのか？	添い寝おっぱいだったので、寝れず、断乳を決意。「おっぱい!!」と泣く息子の姿を見て自分が鬼なんじゃないかと思った（2歳8ヶ月）。	卒乳に関しては特に困ったことはありませんでした。上の子は、離乳食が開始となり、徐々に食べれるようになった時期と私の母乳が出なくなる時期が重なり、すんなり卒乳してくれました（1歳半ころ）。下の子に関しては2歳半位までは夜寝付くときや目覚めたときなど欲したときはあげていましたが、スキんシップの意味が強くと母乳は出ておらず、こっちは自然と止まりました。
③子どもの睡眠に関して	夜間3～4時間おきの授乳が、2時間おきに返ってしまい、断乳までつらかった。（6カ月）断乳後も2～3回は泣いてママをさがし、朝も隣にママがいないと号泣。となりにいくと再び寝てしまって朝なかなか起きず困りました（1歳5ヶ月）。	あまり長く寝てくれない、昼寝30分くらい、夜1時間おき（3ヶ月～1歳）。今でも夜中何回も起きる（2歳）	夜も授乳しているので、おしゃぶりがわりになっているので、夜は親はぐっすりお産してから寝たことがないです。	眠りが浅く、物音をたてないように生活する日々（3ヶ月）。	特に睡眠についての悩みもなく、よく寝て規則正しく過ごせていると感じていますが、上の子が小学生になり学校で頑張ったぶん夜は早めに寝せてあげたいのと、下の子は保育園でお昼寝をしてきているのでパワーが有り余っていてまだまだ寝ない！という状況です。実家に同居しているため家族の協力を得て上の子だけ先に寝せたりしています。翌日学校がお休みのときは一緒に寝ます。
④離乳食に関して	あまり食べてくれず、おっぱいが不安でした（8ヶ月）。やわらかいものしか食べず、固さがすすまなくて心配でした（1歳2ヶ月）断乳して食べる量は少し増えましたが、限られた食材料しか食べず、外食が難しかったです（1歳5ヶ月）。	あまり食べなかった（10ヶ月）。		おっぱいばかりでなかなか食べず、料理が下手なのか…と落ち込んだ（2歳ころ）。	上の子は離乳食はなかなか食べたがらず、おかゆ、そうめん、にんじん……。などせっかく作っても食べてくれないことも多くありました。唯一バナナをつぶしたものはよく食べてくれました。上の子は今でも食は細いほうです（5-6か月ころ）。下の子は、正反对で初めからよく食べてくれ苦労はありませんでした（5-6か月ころ）。今も食べることは大好きです。
⑤遊びに関して	ママべったりで家でも外でも大好きな車以外で遊ぼうとしなくて困りました（8ヶ月）団地で遊ぶ子供は、近づくとうしないので心配だし、他のママとお話できなくて辛かったです。すべり台、ブランコなどの遊具もこわがってできず、遊びのバリエーションが増えなくて、どう時間を過ごしたらいいかわからなくて車のおもちゃばかり与えてしまいました（1歳6ヶ月）。	戸棚や引き出しを開けてしまう。	おともだちをおしたり、髪の毛をひっぱたりしてた時期があり、その時は困っていました。（1歳半）親も一緒に遊んでほしいみたいでお料理もおきている間はできません。1人でもう少し遊んでくれるといいです（2歳2カ月）。	自分の遊びを邪魔されると、かんしゃくを起こし、大泣き、ひっくり返る、たたく…他のお子さんが近付くとドキドキしていた（2歳ころ）。	特に困ったことはありません。季節を感じられるようにできるだけ外あそびをするようにしています。男の子は野球やサッカー、女の子はなわとびや鉄棒とそれぞれ好きなことをしたり、一緒にあそんだりその時々をしています。もちろんけんかもありますが、そういうものでしょうから……。
⑥排泄に関して	トイレへの興味がなくなっていくきたがらなくなってしまう困りました。義両親から「そろそろオムツは卒業だ」と言われてとても焦り、プレッシャーで息子につらくあたってしまいました（2歳10ヶ月）。うんちをオマルトイレでしたがらず、尿意もわかっている様子なのに、おむつでしてしまうことにイライラしました（3歳2ヶ月）。	便秘で3日に1回くらいしか出ない（1歳～現在）。	おむつ100パーセントの状態です（2歳2ヶ月）。	「おむつはもっと大きくなったらやめる!」と宣言され、困っている（2歳4ヶ月）。	トイレへの自立に関して不安でしたが、保育園で始まった時期にお家でもスタートして、うまくいったほうだと思います。安定しない時期は、お店や家でもおもらしはしましたが、そういった経験を通してうまくパンツに移行できたと思います。
⑦その他子育てに関して感じたこと	心配ばかりしていたけど、いつかはできるようになることだったなと今は思います。3歳前から母子分離の教室で週1回めいっばいママ以外の大人と遊んでもらうことで、とても成長しました。今の核家族の家庭環境で3歳までママと過ごすのはメリットばかりではない気がしました。		夜1回のみの歯磨きなんですけど嫌がってこまります。		特に初めての育児のときは不安と期待とがあって、育児雑誌などを熟読したものです。それによって、良かった部分と現実との差にかえて不安になったりしました。子育てに不安があるとき、気軽に相談できる人も必要だと思います。親や友達、保育園の先生など、私自身も多くのアドバイスによって何度も助けられました。

でいる」。睡眠に関しては「(3ヶ月～1歳で)あまり長く寝てくれない、昼寝30分くらい、夜1時間おきに起きる」。離乳食に関しては「(10ヶ月で)あまり食べなかった」、排泄に関しては「(1歳～現在)便秘で3日に1回しか出ない」と、トレイトレーニングには触れていないが、順調に排泄が行われているとは思えない記述である。遊びに関しては「戸棚や引き出しを開けてしまう」と記載していた。これも乳児のごくふつうの行動である。

②いらだちタイプの場面ごとの特徴

【授乳場面】いらだちタイプでは、授乳の記載に特徴が見出せた。「赤ちゃんのおっぱいの飲み方が下手(下手くそ)」「(おっぱいを)上手に吸えない」「おっぱいを嫌がる」「3ヶ月でミルク嫌いか?」などの記述からは、育児の最初の授乳という母子の共同作業が、母子ともに慣れてだんだんと上達していくものだという感覚を、母が獲得できていないことがわかる。また、「夜中の授乳が苦痛」も多かった。「外出先や友人宅など人がいる場になると、おっぱいを欲しがり、外出が億劫になった(7ヶ月)」「人前でもおっぱいを欲しがり、すぐに胸を触ってきたこと」などの記載もあり、子(赤ちゃん)が様々な場でおっぱいを欲しがるとの行為が自然なものであることを、母は受け入れられずにいる。さらに、「母乳育児にこだわり、理想の育児にこだわり、精神的に疲れてくたかった。→睡眠、食事にも理想があった」との記載が物語っているように、母が赤ちゃんの欲求に添うのではなく、育児書や自分を基準にして、授乳時間を決めている傾向があるので、目の前にいる赤ちゃんの様子をみていないことがわかる。そのような形で授乳時間にこだわっているので、「赤ちゃんがおっぱいやミルクを飲みながら、身体を押さえつけ飲ませた」「無理矢理、押さえつけても飲ませた」という記載もあった。

他の2グループと比較すると、いらだちタイプの大きな特徴は、赤ちゃんに授乳することによって「イライラする」「落ち込む」「寝不足と不安とノイローゼになりそう」「イライラして泣きたくなった」「夜泣きのたびに授乳して、イライラして、夫に当たったり、大声を出した」「苦痛」「落ち込んだ」「外出が億劫」「ストレスを感じる」などの感情が表出されていることであった。さらに、授乳で早期から困難を訴えた母たちは、睡眠、離乳食、排泄の場面でも困難を感じていることが、自由記述から読み取れた。

【卒乳・断乳場面】卒乳・断乳に関しては、授乳に比べて「特になし」の記載が目立ったが、卒乳後に「指しゃぶりが始まった」「朝まで寝なくなった、突然起

きる」などの記載があり、睡眠場面と絡めた記載が多かった。「夜間2時間おきの授乳で疲れて断乳。断乳後、乳首をさわりながら寝ようになって、不快感で苦しかった」などの記載もあった。2歳過ぎて卒乳・断乳できていない場合でも「授乳しないと寝ない」「離乳食食べない」ことがその理由に挙げられていた。また「(母親自身が)おっぱいを辞める気にならず、ズルズル続けた。早く子どもを寝かせて自分の時間が欲しかった。」「(母親自身が)そろそろ卒乳したかったが、添い寝がやめられなかった。断乳後子どもが暴力的になり、不安定でおっぱい触る、抱っこで寝て布団に移すとすぐに起きる」などの記載がみられた。ここでも、授乳が寝かせる、または泣き止ませる手段となってしまうことがわかる。

赤ちゃんの成長と共に、段階的に授乳・睡眠が安定し、自然に断乳・卒乳がすすむのではなく、母の授乳や睡眠に関する考えや事情が、卒乳・断乳の基準となり、そのために困難が生じていると思われた。

【睡眠場面】「夜泣きがひどい」「抱っこじゃないと寝ない」「朝まで寝ない」「おっぱいじゃないと寝ない」との記述が多かった。同時に(母自身が)「イライラした」「イライラして逃げ出したい」「育児を投げ出しそうになった」「つらい」「不安」「すごいストレス」「辛く悲しかった」「夜になるのが怖い」という感情表出も、他の2グループとは全く異なる特徴だった。さらには「イライラして半分力づくで寝かせた」「イライラして怒って、泣かせながら寝かした」「子どもに当たる」などの記載もあり、睡眠場面ではイライラ度の高さが窺えた。

【離乳食場面】「離乳食を作っても食べてくれない」の記載が多く、その原因として「おっぱいばかりで食べない」「離乳が遅かった」などが挙げられた。「保育園では食べるが家で食べない」「好き嫌いが激しい」との記載もあった。また、「食べ遊びが多い」「食べ遊びで散らかす」「手づかみで食べる、ぐちゃぐちゃにする」などの子の食べ方を問題にしていた。同時に「(母親自身が離乳食を作るのが)嫌になった」「悩んで疲れた」「イライラした」「きつく怒ってしまう」「ストレスだった」との記載が見られた。

【遊び場面】子どもの問題行動として、家族や集団の中で「かじる」「かみつく」「手も足も出す」「叩く」「おもちゃを奪う」「突き飛ばす」「ひっかく」など他者に対しての行動や、「床に頭をぶつける」などの自傷行動の記載があった。また「一人遊び出来ない」として「家事(仕事)の邪魔をする」なども記載も見られた。さらに「(子どもが)飽きっぽいので腹が立つ」

「家のものを勝手に持ち出す」「母親から離れず、ママ友と話せなかった」「わざとやっている。カットになって怒ってしまう」など、子どもへの不満を感情的に訴えていた。

【排泄場面】「(子どもが) トイレに行きたがらない」「教えない」「トイレに行かずにオムツに(排泄)する」「本人にやる気がない」との記載が多かった。また、トイレトレーニングに関して、母自身が「イライラして怒った」「ストレスになった」「大声で怒鳴ってお尻を叩いた」「(子どもに) 辛くあたる」「失敗が許せない」「ついつい怒ってしまう」などの感情的な表現が多かった。

【その他の場面】「(子どもを) 親の都合で怒っている」「叱ってしまう」などや、「子どもの気持ちがわからない」「トイレトレーニングや叱り方がわからない」などの記載があった。さらに、母自身について「イライラして子どもにあたってしまう」「イライラして思いつめることがある」「子どもから離れる時間が欲しい」「夫婦仲が悪い」などの記載があり、母自身のメンタルヘルスの悪さが目立った。

③まとめ

いらだちタイプにおいては、特に授乳場面に特徴があると思われた。授乳開始直後から長期間に渡って、授乳時の母自身の不快感が続き、そして子にいらだち、それに直結して、子の睡眠が影響を受け、月齢相応の発達をしないことで、その後の離乳食、卒乳・断乳、排泄に悪影響を及ぼしていると考えられた。また、いらだちタイプは、育児に母自身の理想(イメージ・育児書・マニュアル・ネット情報など)があり、母は、赤ちゃんがその通りに行動してくれることが当たり前だと思っている。そのため、思いどおりにならない赤ちゃんにいらだつことになる。また、育児以前に、母が夫婦関係、対人関係で何らかの問題を抱えていて余裕がない、そして、圧倒的に感情的に、どの項目でも「イライラする」「子どもに当たってしまう」「落ち込む」「苦痛」「ストレスを感じる」などの具体的な表現が列挙されていた。

5. 3 おびえタイプの特徴

①典型例(表1)

Cさんの場合: 授乳に関しては、「(2歳2ヶ月で) 今も授乳していて、本人まかせにしている、親としてはまあいいかという感じで、母乳100%で育った」と記載していた。一見、トラブルがないかのようにみえるが、2歳2ヶ月で「授乳は本人まかせ」という表現には、年齢に応じた欲求を見極めることができずに、

ただ、泣かせないために授乳している姿がみてとれる。いらだちタイプと異なりおびえタイプは、授乳することで子に対してイライラする感情は生じないが、子が泣くことを恐れる、おびえる心情が存在する。その結果、泣かれないので、常に授乳するということになる。子の泣きに対するおびえは、他の場面にも共通している。卒乳・断乳に関しても「本人まかせで、いいのか?」と迷いながらも、「夜も授乳しているので、おしゃぶりがわりになっているので、夜、親はぐっすりお産してから寝たことがない」とある。子が誕生してから2年間も、子に泣かれるよりは寝不足であることに耐え続けている。離乳食については記載がなかったが、当然、進んでいるとは想像できない。遊びに関しては「(1歳半で) 友達を倒したり、髪の毛をひっぱったりした時期があり困った、(2歳2ヶ月) 親も一緒に遊んでほしいらしく、(子が) 起きている間は料理もできない、一人でもうすこし遊んでくれるといい」と子の要求するままに生活している様子が伺える。言い換えると、母が子から離れると泣くので、泣かれるよりは側にいたほうがいいということで、子にふりまわされていることになる。排泄に関しては「(2歳2ヶ月で) おむつ100%の状態」と記載されている。トイレトレーニングさえも、母親が「本人まかせ」と考えていれば、この記述も当然といえるだろう。おびえタイプでは、子が大泣きしたり、奇声を挙げたり、大暴れしたりすることが、母にとっては恐怖以外のなものでもないのである。

Dさんの場合: 授乳に関しては「(8ヶ月で) おっぱいばかりで離れられなかった」とある。8ヶ月は、離乳食がある程度進んでいる時期であるが、「おっぱいばかり」ということは、Cさん同様、子に泣かれることを恐れて、授乳し、それで子が泣かないでいるならそれでいい、という母の心情が読み取れた。この母子の悪循環は卒乳・断乳に関しても大きな影響を与えており「(2歳8ヶ月で) 添い寝おっぱいだったので、(自分が) 寝むれず、断乳を決意、“おっぱい! おっぱい!” と泣く子の姿を見て、自分が鬼なのではないかと思った」と記載していた。Dさんは、子を出産してから2年8ヶ月、ずっと寝不足を我慢して、ようやく断乳を決意した。しかし、泣く子を見て、断乳を決意した自分を責めている。睡眠に関しては「(3ヶ月頃で) 眠りが浅く、物音を立てないように暮らす日々」と記載があったただだが、断乳に関する記載から、子の睡眠も月齢相応の発達から遅れていたことが想像できた。離乳食に関しては「おっぱいばかりでなかなか食べず、料理が下手なのかと落ち込んだ」とあり、

子が嫌がったり、泣いたりすると、離乳食よりはおっぱいを与えていたようである。遊びに関しては、「(2歳頃で)自分の遊びを邪魔されると、癇癪を起こし、大泣き、ひっくり返る、叩くので、他の子どもが近くと心配した」とあり、Dさんは、子のこのような反応(癇癪を起こす、大泣きする、叩くなど)をひどく恐れていたことがよくわかる。排泄に関しても「(2歳4ヶ月で)“オムツはもっと大きくなったらやめる”と宣言されて困っている」と記載していて、子の意のままにふりまわされている印象がある。トイレトレーニングのしつけにより泣かれるなどのトラブルを恐れているのである。

②おびえタイプの場面ごとの特徴

【授乳場面】「(子どもが)いつでもどこでもおっぱいを欲しがる」「泣けばおっぱいを与えた」「おっぱいしか飲まない」との記載が多かった。授乳は赤ちゃんが泣かないためや寝かせるための手段となっている。赤ちゃんがいつ泣き出すか分からないので「(そばを)離れられない」や「授乳しても泣いてばかりいる」との記載も多かった。さらに「授乳しても15分で目を覚まして、寝なかった。夜、5～6回の授乳で寝不足になった」との記載があり、授乳とそれに伴う睡眠で母が混乱している様子が伺える。また、おびえタイプの特徴を明確にしている記載として「(授乳は)本人まかせにしている」があったが、母が授乳時や睡眠時に「子が泣く」ことを極端に恐れていることからの表現であると思われる。

【卒乳・断乳場面】卒乳・断乳も「子どもまかせ」と考えている傾向が見られた。逆に言うと、母に卒乳・断乳に対する主体性の無さが目立ったが、その背景には、子を泣かせないためには授乳の手段しかないという根本的な問題があると思われる。「(卒乳・断乳に)子どもにその気がみられない」「母子で相談して、自分たちのペースでやろうと思っていた」と記載されている。また、子(赤ちゃん)を「本人」との表現も見られた。さらに「夜中に勝手におっぱいを飲むことがあった」「授乳を続けていることを保育園には隠した」などの記載にも注目する必要がある。それは、授乳に関して、誰にも相談を出来ないでいる母の姿でもあるだろう。

【睡眠場面】子どもの「夜泣き」が多く、また「寝かしつけられない」「抱っこしないと寝ない」との記載が多い。授乳場面や卒乳・断乳場面と同様に、睡眠においても「本人まかせ」「本人が寝たくないと言う」「子どもの『言うがまま』にしている」という記載もみられた。さらに「(寝かしつけようとすると)大声

を出し、暴れる」「怒ると寝たふりをされる」などの記載もみられた。「育児」そのものにおいて、親がリードを取れずに子ども中心で翻弄されている様子が記載されている。これも、子の「夜泣き」「泣き」が母に大きく影響して、子に泣かれることに過敏になっている結果と読み取れた。

【離乳食場面】卒乳・断乳が遅い傾向にあるため、離乳食に大きな影響を与えている。「離乳食を食べたがらない」「食べることに興味を示さない」との記載が圧倒的に多い。また「好き嫌いが激しい」との記載も多く、子どもが一度でも離乳食を口から出すと「嫌い」と即断する傾向があると思われる。さらに離乳食の食べ方について、「わざと(母に)食べさせようとする」「食事中、遊ぶ」「食べ物を投げる」「食べ方が汚い」などの記載が多く、子どもがすぐに大人のようにきちんと食事をする事が出来ると認識しているかのような記載が多かった。しかし、これも「子に泣かれるよりは、そのままのほうがいい」と母が考えているように思われた。

【遊び場面】「兄弟げんかが多い」「TVやDVDを見たり、他の遊びをしない」との記載が多かった。また、「一人遊びを嫌がるので、家事が思うように出来ない」「何でも一緒にやりたがり、(母から)離れず、家事ができなかった」との記載も目立った。「(母自身が子どもに)どう対応してよいかわからない」「月齢に合った遊びがわからない」「“だめ”と言ってもなかなか理解してくれない」「身近に育児への具体的な援助者がいない」など、母自身が困惑している。さらに「(子どもが)気に入ると、人やおもちゃも離さない。人に譲れない。癇癪をおこす」「自分の妄想の世界とルールを強要してくるので、一緒に遊んでも(母が)つまらない。お友だちに対しても威張るのでなじめない」「おもちゃを突然投げ出す」「他の子どもがいると嫌がる。おもちゃをとられる」などの記載もあった。母と子が対等の立場にあり、母が子に泣かれることを恐れるあまり、子のなすがままに従っているように見える。

【排泄場面】「気が向いたときしかトイレに行ってくれない」「トイレに誘っても“嫌だ、行かない”と言い、やる気がみられない」「ウンチは教えない。いつになったら教えるのか知りたい」「“おむつはもっと大きくなったらやめる”と宣言されて、困っている」「トイレトレーニング開始なし。(子が)興味がない」など、授乳場面や卒乳・断乳場面で見られた「子どもまかせー本人まかせ」がここでも明確に出ている。また「トイレで排便しない。紙おむつに(排便)する」との記載も多かった。さらに「お風呂の中でコロコロウンチ

されて、お風呂を洗わないといけないので（2歳2ヶ月）困る」との記載もあり、母自身の感覚として「子どものウンチは汚い」との認識があることは衝撃的である。「トイレトレーニング開始しても、5分毎に“おしっこ”と言われて中断。面倒なのでいい」との記載もあった。排泄に至っては、母が子を誘導しながらトイレトレーニングを行うことは期待できない状況になっていると思われた。

【その他の場面】子への対応に関する記載が多い。「(子が) 気に入らないことがあると何でもかんでも物を投げつけたり抵抗する」「泣いたり大きい声で騒ぐ時、その理由がわからず、あやすよりおっぱいをあげてしまおう」「2人同時に泣かれるとどうしてよいかわからない」と記載されていた。また「(母自身が) 子どもの相手ばかりはつらい」との記載もあった。子に泣かれて母が途方にくれている様子がうかがえる。

③まとめ

おびえタイプにおいては、「本人（赤ちゃん）まかせ」という記載が特徴的であった。「本人まかせ」は、母が子との関わりが面倒で関わりたくないというよりも、子が泣くということそのものが、母には恐怖であることの表現であると推測された。いらだちタイプは、子に対しての不快感情を直線的に表現していたが、おびえタイプの表現は、間接的で表面的であるために、一見しては深刻さが感じたいが、子の泣きに関して、非常に強い恐怖感、おびえを持って接していることが問題であると思われた。おびえタイプの母は、子どもとの関係において、保護的な共生関係を築くことができず、子ども（赤ちゃん）に「おびえ」や「恐怖感」持ち続けることで、子の発達に多大なる影響を与える可能性があると思われる。

5. 4 中立タイプの特徴

①典型例（表1）

Eさんの場合：「一人目の子育ての時、何もかも初めてで、何をやっても泣き止まず、恥ずかしながら子どもと一緒に泣いてしまった。哺乳瓶を嫌い、全く飲んでくれず、卒乳まで母乳で育てた。生後1～2ヶ月は睡眠リズムも整わず、授乳→ようやく寝かせる→排泄ですぐに目が覚める→おなかがすいたと泣く、しかし母乳がたまっていなので出ない。夜中も大福やおにぎりを頑張って食べて、睡眠不足、疲労で困った。その後、時期が来ると睡眠リズムも一定し、母乳もまとめ飲みをしてくれるようになり、解決していった（1～2ヶ月ころ）」と授乳と睡眠を絡めて記載していた。初めての子育てに戸惑い、困りながらも、子の様

子や反応を見ながら、段階的に、母子の一定のリズムが1-2ヶ月で獲得された経過が表現されている。初期の授乳と睡眠がこのような経過をたどると、離乳食や卒乳・断乳が実にスムーズで、排泄も問題なく経過していた。排泄に関しては「(排泄が) 安定していない時期には、お店や家でおもらしはあったが、そういった経験を通してうまくパンツに移行したと思う」と、失敗も大事な経験と捉えていた。

②中立タイプの場面ごとの特徴

【授乳場面】授乳の初めは、それなりに大変だとは感じながらも、子（赤ちゃん）の様子を見て授乳しており、日々の生活の中で、経験しながら工夫しながら授乳をしているので、段階的に母子共々、授乳がスムーズになっていた。「授乳は大変だ」と記載していても「(子が) 可愛い」「苦にならない」と記載していて、母子関係の安定さを印象づけた。

【卒乳・断乳場面】授乳がスムーズに行えていると、卒乳・断乳もスムーズで、他の2グループに比べて、早い時期に卒乳・断乳が出来ていた。

【睡眠場面】何らかの問題があっても、短期間で解決していた。夜泣きがあっても一時的であり、「夜中の授乳は大変だったが、自分は寝不足でも子どもが可愛かった」「(子が) なかなか寝ないが、本読んだり、話しをしたり、(子の) 安心が大事」との記載があった。

【離乳食場面】離乳食もスムーズで、母が子の様子を見ながら、色々と工夫をして段階的に行っていた。卒乳・断乳と離乳食の関連は大きいことがわかる。また、子どもの「食べ遊び」も母たちは当然なことと受け止めていた。

【遊び場面】色々なことがあるが、子の発達からみて「問題ない」との見方をしている。また、子をよく見ていると思われる。

【排泄場面】トイレトレーニングも子の発達を見ながら、段階的にやることを重視していた。他の2グループではなかった「(子を) 褒めて(トイレトレーニングを) 進めた」との記載があった。

【その他の場面】肯定的な記載が多くみられた。また、他の2グループには見られない、「子が可愛い」「子育てが楽しい」「これからも楽しみ」などの記載があった。

③まとめ

中立タイプにおいては、授乳場面がスムーズで、母が子をよく見ており、子の状況に合わせて工夫することができており、良好な愛着が形成されているだろうことが、きわめて明確に示されていた。

6. 考察

6. 1 愛着システム不全に陥る経緯

以上、いらだちタイプ、おびえタイプ、中立タイプの3グループに分けて、質的な分析を行なってきた。それにより、乳幼児期の母子関係のありようが明らかになった。

表1の中立タイプの典型例Eさんの例からは、授乳、睡眠、離乳食、卒乳・断乳、排泄、遊びに関する基本が示された。初めての子育てに戸惑い、困りながらも、初期の授乳や睡眠において、Eさんが子の様子や反応を見ながら対応し、そして段階的に母子共同で、授乳や睡眠の一定のリズムが獲得された経過が表現されている。初期の授乳と睡眠がこのような経過をたどると、離乳食や卒乳・断乳が実にスムーズで、排泄も問題なく経過していた。このことから、中立タイプの母親は、初期の授乳と睡眠における子の泣き声やぐずりを母の内臓感覚レベルで共鳴することができる²⁰⁾ので、子が求める安定を与えることができていることがわかった。

それに対して、いらだちタイプのAさん(表1)は授乳に関して、長期間にわたり困難さを感じていた。この授乳に対する困難さは、子の睡眠にも大きな影響を与え、「(誕生してから)夜間、3～4時間毎の授乳が、6ヶ月頃から2時間おきになり、断乳するまでつらかった。1歳5ヶ月で断乳したが、子が乳首をさわりながら寝ようになって、不快感で苦しかった」としている。Bさんは、人前で子がおっぱいを欲しがると、それで母の乳房を触るという自然な反応に対して不快感を表現していた。授乳そのものがAさん、Bさんには不快なものとなっており、母子間の悪循環が、睡眠、卒乳・断乳、離乳食、排泄に大きな影響を及ぼしていることが推測された。

図1に示したように、いらだちタイプは、子から発せられる生体防御反応としての負情動によって、母の内臓感覚に不快が生じ、負情動が喚起されている。そのため、子のSOSの訴えに対して適切な情動調律²⁵⁾が行なわれず、母は自身の辺縁系を支配している負情動を制御するために必要な行動(子にいらだち叱責)をとることになる。これがいらだちタイプの愛着システム不全である。

おびえタイプのCさん(表1)は、「授乳は本人まかせ」と表現し、子がおっぱいを飲みたくて泣くという生体反応を極力避け、子を泣かせまいとして授乳していた。Dさんも同様に、子に泣かれることを恐れて、授乳して子が泣かないでいるなら、それでいいという

心情にあった。子の泣きに対するおびえは、睡眠、卒乳・断乳、離乳食、遊び、排泄に関しても同様であり、子の発達そのものに大きな影響を与えていると思われた。

図1に示したように、おびえタイプは、子から発せられる生体防御反応としての負情動(泣き声)によって、母の内臓感覚に不快が生じ、負情動が喚起される。そのため、子のSOS(泣き声、奇声)の訴えに対して適切な情動調律²⁵⁾が行なわれず、母は自身の辺縁系を支配している負情動を制御するために必要な行動(子におびえひれふす)をとることになる。これがおびえタイプの愛着システム不全である。

いらだちタイプ・おびえタイプいずれの愛着システム不全も、授乳開始から極めて早期に形成され、不適切な関わりを生んでいると考えられた。

鯨岡¹⁴⁾は、発達心理学の視点から健全な乳幼児期の親子の原初的コミュニケーションのありようを2つのパターンに分類した。養育者が子どもの感情の側に入り込み、子どもに合わせる状態を「成り込み」と言い、逆に養育者が子どもの感情を大人の願う方向に向かって調整することを「巻き込み」と言う。「成り込み」は「相手が現に生きつつあることをおのれのこととして、つまりおのれを相手に重ね合わせて、相手を生きようとする様態¹⁴⁾」であり、「巻き込み」には「子どもが今現在において示すある状態に対して、養育者がそれを別の状態にもっていくことが望ましいと考え、そこで養育者自身の身体のもつ力動感を調節し、そこに子どもを浸し込むことによって子どもの気持ちを調節する¹⁴⁾」側面があるという。この「成り込み」と「巻き込み」のバランスのよいコミュニケーションによってしつけは成立し、同時に健全な愛着も形成されることが考えられる。感情制御の脳機能²⁰⁾の点からは「成り込み」は、子の辺縁系(身体・情動)への共鳴(ボトムアップ制御)であり、「巻き込み」は母の前頭前野(認知・理性)によるトップダウン制御であると言い換えることができる。本研究で示された「いらだちタイプ」は「巻き込み」のみに、「おびえタイプ」は「成り込み」のみに偏ったコミュニケーションに陥っており、かつ母の身体に負情動が喚起されることにより、悪循環が形成されているとみることができる。

6. 2 愛着システム不全と睡眠・排泄の発達の遅れ

以上述べてきたように、授乳期初期において愛着システム不全が生じ始めると、確実に子の睡眠に大きな影響を与えることになる。乳幼児期は多相性睡眠型であり、成長とともに脳が発達すると、通常、外界の感

表2 愛着システム不全評価尺度項目案と本調査における出現数

	質問項目	いらだちタイプ	おびえタイプ
1	母の乳房のトラブルから、授乳が苦痛になった。	1	0
2	外出先で、子に母乳を求められるのがいやだった。	1	0
3	子が胸をさわってくることが苦痛だった。	1	0
4	母乳のために、子と離れることができないことが、苦痛だった。	1	0
5	子を寝かしつけることに時間がかかりとてもむずかしかった。	1	0
6	子の求めが親の思いと異なるとき、苦痛を感じた。	3	0
7	子を泣き止ませるために、常に授乳していた。	0	2
8	子に泣かれると、どうしていいかわからなかった。	0	3
9	子に泣かletたくないから、授乳していた。	0	6
10	子が夜間に何度も起きるので困った。	1	1
11	夜中の授乳が苦痛だった。	3	3
12	子が乳首をかむので、授乳が苦痛になった。	4	2
13	子の母乳の飲み方が下手なので、うまく授乳できないと思った。	4	5
14	母の母乳の出が悪いから、うまく授乳できないと思った。	3	8
15	母の乳首の問題で、うまく授乳できないと思った。	4	2
16	子の求めがマニュアルどおりではないので、ちゃんと母乳（ミルク）の量が足りているのかわからなかった。	2	6
17	子の求めが親の思いと異なるとき、授乳していいのかどうか迷った。	1	1
18	子が母乳を求め、ミルクを飲んでくれないので、預けることができず困った。	4	3
	計	34例	42例

覚刺激や社会的必要性から単相性睡眠（まとめ寝）に移行する²¹⁾。

いらだちタイプおよびおびえタイプの記述をみると、1歳過ぎてもまとめ寝にならない傾向があり、極端な記載では、「(3ヶ月～1歳で)あまり長く寝てくれない、昼寝30分くらい、夜1時間おきに起きる」(いらだちタイプ)、「子を出産してから2年8ヶ月、ずっと寝不足を我慢して、ようやく断乳を決意して」(おびえタイプ)などがあった。他にも夜泣き、抱っこ寝しないと寝ない、などの記載が目立ち、睡眠の月齢相応の発達＝脳の発達の遅れも心配された。言い換えると、いらだちタイプやおびえタイプの母側に愛着システム不全が生じ始めると、確実に子の睡眠に大きな影響を与え、子は過覚醒状態におちいっていると思われる。

排泄については、昨今、排泄の自立の遅れが指摘されているが、一般には日本の紙おむつの性能が高レベルだからと、安易に考える風潮があるが、より深刻な現状をこの調査は示している。

排泄は脊髄の反射中枢に支配され、内臓からの求心性インパルスは、脊髄内で介在ニューロンを介して側角の自律神経節前ニューロンに伝えられ、効果器の応答を起こす(脊髄反射)。乳幼児では上位中枢からの経路が十分に発達していないため、同様(尿が貯留し

て膀胱壁が伸展すれば反射的に排尿が起こる)の反射的排尿が起きる¹⁵⁾。この状態からはじまって、発達と共に排泄の習慣の獲得に至っていく。排泄の習慣は、膀胱や直腸の括約筋の活動を、意識的に尿意や便意と結びつけ、また適当な場所や言葉と結びつけてコントロールする過程である。これは、自然で生理的なリズムを、強制的に変更していく過程として、多くの社会で長期的に、厳しいしつけが行われる²⁷⁾。この難しい排泄の自立は、これまでの母子関係の基本があって、初めて成立する過程である。子の排泄の自立に、もっとも必要なことは、子に対しての肯定的な評価(誉める)や励ましであり、失敗こそ次の段階のステップと考える母の精神的余裕である。

中立タイプは、基本通り、母がそのように動き、短期間で子は排泄の自立を獲得しているが、いらだちタイプは、子に対して、いらだち、叱責をすることで、子の排泄の自立は長期間を必要としてしまう。おびえタイプは、子が泣いたり嫌がったり騒いだりすると、子への関わりを中断するために、子の排泄の自立のために長期間を要していることがわかる。

図1に示したように、いらだちタイプとおびえタイプでは、授乳開始の早期から、子から発せられる生体防御反応としての負情動によって、母の内臓感覚に不

快が生じ、負情動が喚起される。そのため、子の SOS の訴えに対して適切な情動調律²⁵⁾が行なわれず、母は自身の辺縁系を支配している負情動を制御するために必要な行動（①子にいらだち叱責②子におびえひれふす）をとることになる。愛着システム不全は、子の睡眠、卒乳・断乳、離乳食、遊び、排泄に大きな影響を及ぼし、しいては、子の情緒発達に多大な影響を与える可能性があるため、今後の乳児健診における母子観察の重要な視点になるだろう。

7. 乳幼児の母子の愛着システム不全尺度項目の選定

本論の目的は、自由記述によって得られた上記の質的データをもとに、愛着システム不全評価尺度の項目を選定することである。

愛着システム不全は、図 1 に示した愛着システム不全の仮説モデル²⁰⁾にそって、乳幼児の行動によって母に喚起される負情動の強弱およびその負情動に対処するための母の行動によって、評価される。

本調査の質的分析によって、愛着システム不全は、授乳をめぐる母子の相互作用におけるつまづきを出発点として、その後の育児場面における悪循環を生み出していくことが明らかになった。授乳をめぐる母子のやりとりは、子の泣きに対して、母が自身の辺縁系レベルで共鳴するという身体的な相互作用により成立する行為である。そこで母子ともに心地よい体験をしていけば、母子のコミュニケーションの基盤は良好なものとなり、その後の離乳食・卒乳・排泄のしつけなどの育児場面におけるコミュニケーションにおいても、母が子の身体に適切に反応できるものと思われた。反対に、子の泣きに対して、母にいらだちやおびえが喚起される場合には、母は自身のいらだちやおびえに対処するための行動をとることが第 1 選択となるために、子の身体の求めに対して適切な反応をすることができず、図 1 に示したような愛着システム不全の相互作用が定着化していくものと考えられた。

そこで、愛着システム不全を評価する尺度項目を作成するにあたっては、授乳場面とそれにまつわる睡眠場面に関する記述に焦点化した。授乳場面と睡眠場面における記述が不十分なものを除き、いらだちタイプ（34 例）とおびえタイプ（42 例）それぞれの記述を整理し、抽象化してまとめたものが表 2 である。表 2 に示したように、いらだちタイプのみに特徴的な項目、おびえタイプのみに特徴的な項目、両方に共通している項目に分類された。

よって、これらの 18 項目を愛着システム不全評価尺

度の項目として、選定する。今後、量的データによる調査を実施し、統計処理による因子妥当性と信頼性の検証を行い、愛着システム不全評価尺度を完成させる予定である。

付記：調査にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) Ainsworth, M. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. : Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation. Hillsdale, NJ: Erlbaum, 1978.
- 2) 安藤智子・遠藤利彦：第 6 章青年期・成人期のアタッチメント：数井みゆき・遠藤利彦（編），アタッチメント—生涯にわたる絆—，ミネルヴァ書房，127-173，2005.
- 3) 青木紀久代：親—乳幼児心理療法における精神分析的発達理論と愛着理論—インターフェースとしての間主観的観察—，精神分析研究，52（1），2008.
- 4) Bowlby, J. : Attachment and loss, Vol.1 Attachment. New York, Basic Books, 1969.
- 5) Bowlby, J. : Attachment and loss, Vol.2 Separation. New York, Basic Books, 1973.
- 6) Bowlby, J.: Attachment and loss, Vol.3 Loss, sadness, and depression. New York, Basic Books, 1980.
- 7) Cassidy, J. : Emotion regulation, Influences of attachment relationships. In N. A. Fox (Ed), The development of Emotion regulation, Biological and behavioral considerations. Monographs of the Society for Research in Child Development, 59 (2-3, Serial No.240), 228-249. 1994.
- 8) 遠藤利彦：内的作業モデルと愛着の世代間伝達，東京大学教育学部紀要，32，203-220，1992.
- 9) 遠藤利彦：第 1 章アタッチメント理論の基本的枠組み，数井みゆき・遠藤利彦編：アタッチメント—生涯にわたる絆—，ミネルヴァ書房，1-2，2005.
- 10) 遠藤利彦：第 1 章アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する，数井みゆき・遠藤利彦（編）：アタッチメントと臨床領域，ミネルヴァ書房，2007.
- 11) Hazan, C. & Shaver, P. R. : Romantic love conceptualized as an attachment process. Journal of Personality and Social Psychology, 52, 511-522, 1987.
- 12) 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹：日本人母子における愛着と世代間伝達. 教育心理学研究，48，323-332，2000.
- 13) 金政祐司：成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望—現在，成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは—，対

- 人社会心理学研究, 3, 73-84, 2003.
- 14) 鯨岡峻: 原初的コミュニケーションの諸相, ミネルヴァ書房, 103-117, 1997.
 - 15) 久野みゆき・安藤啓司・杉原泉・秋田恵一: カラー図解人体の正常構造と機能IX, 神経系 (2), 日本医事新報社, 2005.
 - 16) Main, M. & Morgan, H.: Disorganization and disorientation in infant strange situation behavior -Phenotype resemblance to dissociative states-, In (eds.) Michelson, L.K and Ray W.J.: Theoretical empirical and clinical perspective. Plenum Press, New York, 107-138, 1996.
 - 17) Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J.: Security in infancy, childhood and adulthood, A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters(Eds.), Growing points of attachment theory and research. Monographs of the society for Research in child Development, 50 (1-2, Serial No.2009), 66-104, 1985.
 - 18) 大河原美以: ちゃんと泣ける子にそだてよう親には子どもの感情を育てる義務がある, 河出書房新社, 2006.
 - 19) 大河原美以: 教育臨床の課題と脳科学研究の接点 (1) —「感情制御の発達不全」の治療援助モデルの妥当性—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第61集, 121-135, 2010.
 - 20) 大河原美以: 教育臨床の課題と脳科学研究の設定 (2) —感情制御の発達と母子の愛着システム不全—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第62集, 印刷中, 2011.
 - 21) 大熊輝雄: 睡眠と日内リズム, 現代臨床精神医学 (改訂版第4版), 26-27, 金剛出版, 東京, 1990.
 - 22) 坂上裕子: 第2章アタッチメントの発達を支える内的作業モデル, 数井みゆき・遠藤利彦 (編): アタッチメント—生涯にわたる絆—, ミネルヴァ書房, 32-44, 2005.
 - 23) 坂上裕子・菅沼真樹: 愛着と情動制御—対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連—, 教育心理学研究, 49, 156-166, 2001.
 - 24) Sroufe, L. A.: Emotional development. The organization of life in the early years. Cambridge, Cambridge University Press, 1996.
 - 25) Stern, D. N.: The interpersonal world of the infant. Basic Books, New York, 1985. 小此木啓吾・丸田俊彦監訳: 乳児の対人世界—理論編. 岩崎学術出版社, 東京, 1989.
 - 26) 田辺恭子・米澤好史: 母親の子育て観からみた母子の愛着形成と世代間伝達—母親像に着目した子育て支援への提案—, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要19, 19-28, 2009.
 - 27) 内山喜久雄・上出弘之・高野清純・小川捷定: 基本的生活習慣, 内山喜久雄監修: 児童臨床進学事典, 岩崎学術出版, 1974.